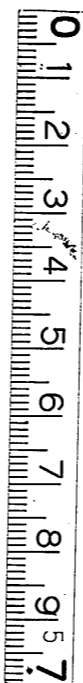
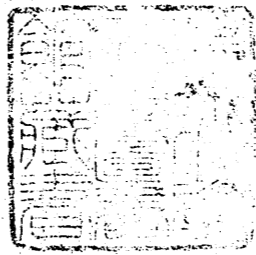


朝野物語

下卷



2104
3



朝鮮物語卷之下

大河内茂左衛門尉源朝臣秀元記

菅氏所蔵

慶長三年戊辰月二日子の刻計小門外の坂下小物音幽小園也大河
内茂左衛門尉源朝臣秀元記
乃術を廻さずききし知事定て敵忍寄けしとて我思我潜小出て
探り聞登し若も大軍近く馳寄て入難きよ於て其旨を
呼ぶふし必滞りて聞て其一人を捨殺し堅固小防と堅
約し門外小出せ城坂下下り岡小園本越後も一人の聲小て静小
城内小いと云大河内是年冬小て水と云越後も各山も三人申

朝鮮物語

夜子細有るまねりと答も大河内とれを問て尋まて来より
給へて田中九津見をも呼出に三人車の松子を問ふ小越後云
ける我不肖の身也とてとも異國本朝の通使と成ては扱を
申極ると事大明高麗日本三國小其隠あり難一情是を案
まると武士するもの徳小非ん有きとを悦の思ひも余
まけふ不思議の評定を聞ぬ某此頃大明小住して騎士千
の將とある其思を計ふより高き海よりも深し骨と粉ふ
一身をひびびいほふとて報さるも足は付く用樂昌國の
旧恩を懐て新怨を忘るを憐れを伐んめを欲さば爰小城内に
まると清心の山旗あり我一夜は不審を蒙りて遠國小奔

まると身ものごとくとも君臣たり一義志をく次は某偽るの思
名とあるも無念より故は後難と願に忠を申して明白の公會
盟必し出有るべ其故を大國傳りて好まといとも兵の詭道
あるまはあ王の計ふ八十多騎の中あて大力の者を抜勝り會盟の壇
上ふ三人の大将を先と一悉く生捕り魯桓の例に任まづ一は後
るの間必し出有るべと寔ふ二心を争ひあて告ぐりらふ大河内三大
將の衆を行て此由を申けまは三將を打ておけ大まを謀がと
驚きり飛驒と一吉返をよ曰殺後門外よめて登城有といとを
終ふ對面不能は殊更今夕の注進きりしては頼るは言語ゆ
迷難一只今富貴の厚恩を願も君臣の義をとり去の道を立

解勿語 卷下

らう事神妙の至感さふ堪へり城内のこれ忠信よありは日か
 大王の忠節さう唯今太馬の褒美さふ及るれども隠密の事
 おまゝ持参も如何と延引を以て主計頭も幕を成立去り後切瑠
 知はる所其方の妻子を熊本の二の丸に籠て堅固の事付付
 若系よ一もは城運を用き帰朝の身と成て角の忠節平と上國
 達き一又の遠嫡子を則裁後若系受領一本知千石と三子若系加増
 跡を継む一女子を人主計改め娘と一然さき方城は一若系
 主計以同心せさふ不捨てると公方言上奉り嫡子の上に出る也
 女子の某が居城豊州四村呼びて予が娘と成て日本國中大小の
 神祇の誓を誓て傳更よ有るや一は是を褒美と思ひ給へとあり

大河内承りて細と三後以て誠後も是と聞て頻に涙を流
 志し物をも云得がかり一は流るる涙を押して三は天明
 州へ流り角人と成て此戰場へ来るといども古御不捨妻女子の
 事を忘る隙を以て山海千里を隔るかれは吹来る風の便を因
 て生死の有松急や有角やありと日夜朝暮心を共に
 おもく悲の夢をを外小相見の事おしひあふ相見え存て在
 り一吉公此有難き山阿熱海も須弥山とも傍りりよ三は松の
 心を清正の山情を以て彼等今も存(晝夜の戦場と成り晝
 子ぞ仍来までぬり事よ裁量よおはる)然るも松の根は成備小
 頼も来るといふと令せしむと置此上の若系此の端

聞て車裂の大難と云ども奉せり向後沙目掛りまどと
法と共小陣を降りけふ

正月三日辰の刻為王の大使とて是も日本國人と覺しき土城下
来て指麾を以て陣を招く田中少太尉と河内茂太尉九津見兵
藏少輔少将と武王の大使より午の刻も漸るまは河内意有
土城下へ下途下れて對面を以て兵を遣はし人びりたり大河内清
聞て城へ入る三太將披露を免すは奉る日今對面の堅物尤
傷り小陣とてども此三日攻めゆるはも河内軍兵競と拔
風を以て悪く病ふ所其も人の大將も氣必小病り一人出て
對面も河内少一相迫らるべしと云り使ゆるはひりりま王

大腹主一此回の攻と盜りりと云まに早鐘を頻小撞懸軍色
お渡り太鼓をせえ標を立て一多くの軍中も判官將軍團扇を
きて軍士を進め一軍城と表を左右のも合まると等く操ふも
攻上る城内も表を先途と防られ一軍攻入事を得る本陣一
引退ふ二軍攻るも攻ては引ひきてる攻登夜のほらひもあく
まをへ替けて一息も継ぎ三日の年の刻を五日の末の刻の終
て操ふもんをほりけり大軍の矢争時の聲ハ響と敷き戦の
鉞戟の光ハ晴光の星よりも多く砲の煙馬不ありハ黒雲の如く
三珠表を奉て白日は隔離一熱軍の旌旗天を掠め戈矛平地ふ竹
草をまじり矢走り雨脚よりも繁りりは角て五日の宵の間乃

月西山の陽のまぎて敵をくひぎりか城内を定て攻めて攻ざ
るらんともぞよ子の初初の事あるに大敵聲をも立を攻寄石
垣半登り同き小時とあざ矢を射に大筒石火矢を打ちけ攻む
る味方早く取合突落し倒れ敵も味方十五小勇力を奮て火
水も成り我々大軍の幸の内より蔚山の働変大地震よりも
駈し籠兵代る味方おし鎗と突引落さる腕の力も貴一匹
流る熱汗の汗を甲冑におさすより三時汗の夜の明る三事を送
ふより遅うりけし漸藤原の空も明方ふありたる敵の大將を
鼓の不知小従と攻むの勢も悉く暮れぬし引れし六六の七六ふ
備を立て引れし兵是を見て早降とほき太鼓とせぬ追

時三夜揚々まぎ切てあると心備をもとぞく千鳥小立跡を
て先小立用心の神小見し一六籠兵一同小何を限り小防ぎま
足の竹時と切て出討死し現世の隙を明あんとぞ大軍の門を
押開く如し一吉幸長馳出門のち小立懸り鎧長刀を横あひを
引敵るに物も狂ゆる各とひの外小急て門の扉を押しそ自決
まぞお落しし系籠兵も死すくして城の内走りの板も上りきり
のひまの巡見まも小誠も引入と見そ流石異國の武者ひ
花やうきり一事どもあり角て六日の早天陸まの押松石跡殿
して退所と大將軍秀詮公一陣小進まを給ふ加藤左馬介毛利
を及も罷出て申けるは直の先陣と有事勿終ふまきりまのり

お人よは先主仰せしごとしと云上り秀詮公仰せし事渡海を
 とくごも金山海の城代お侍らんと依て何の事もさるる無
 念のふ暮りたり此表の追討願書の幸あり汝等が働はれ
 づば麓角今日の戦場予が心に任一人先出登りては
 仰せし事十系騎の備の中一文字小乗入給ふ四使高乃黒母衣
 二騎厨山の麓下を城内の三将をおく軍士誠を懸てこそ
 難き大軍の敵を清て恙なく城と持きまゝと云事天下
 小治るる名譽も一と只今將軍追討るるあか龍兵足手の力弱
 ろらん小一人もあまを門を堅く打て城の上より眠り覺へば
 見物も一と仰下さるる又其次小笠和泉守幅文の小姓母衣

二騎越ては籠城の忠告勢申上り一程一今大將軍公法供一奉る
 由見物と云渡一使の急ぎ軍中一騎のける城内の勇兵六騎の
 上おねり敵の武者はひ味方の追討を見物とて居りたり
 天竺震旦ハハハハハ日本開闢の功来来々々事と聞かば
 経りける終城より然るり秀詮公敵十方騎を其中を八方小乗
 遠一十文字小乗破て備前兼光波おきと云備持を抜持行
 討諸を切腹づると小まぐると馬の改平首書と成幸十三騎の自
 身はよの多給ふ左馬介と右書知泉を先として毛利と
 島津又七郎秋月三郎高橋九郎相良左兵衛佐押はきせり
 心働を見まの命を惜まぬ馳へて大敵を討たぬ多頭知

出羽さしと云ふ勇士あり丹波國須知の城主ありしが羽柴少将秀久
卿丹波の國主と成給へりより古郡を去てまき坂を仕へ毛利と名乗
尉と名乗て此戰場へ来りしが左馬介敵を切きて歩仍立上成
て危を見て毛利馳来り左馬介に向ひ敵を四方に追散し急
ぎ馬より下りて左馬介をとりまきを我に又兼替小打棄て十方
一眸を賦て首級あまを討けける敵大不利を失ひ敗せしと味方
弥勝小糸五六町其間遠をゆきを討散を敵大軍を負せし
必に弱き友をも圍得たりて廣き枯野の萩原に亂入せし大將軍
伊馬駿を立ちし鐘鼓の山下を以て追ひ軍兵を止め勝時を上
はせ和泉をたす介まき坂を以て宣ひしと此秋京東西長く

南北廣く茂るるれ大敵必伏を置し味方小勢にて勝し兼
長追し若不覺仕出まき今朝の働空なるべしと思へ兼止る
秀詮がね分別玉似りや如何やと宣ふ三人形り此夜初子の伊
陣より自身先陣の山下を以て以の如くの虎舌頭小糸難く
存奉るのみ只今の馬印を止ませしれ伊馬介立大相國公下知六
未三つはも勝りいと怒り感奉の首言上を秀詮公は満悦の
心機嫌ふて今日の高名實檢し注し記しと仰て寛和泉を穿
鑿して遂に右等賀古き茶目深ふぞ記し言上高麗國義
川河原合戦慶長三年戊午六月六日辰の刻高名日記

大將軍秀詮公伊高名首級

五百十 杉原下野守 五百三十五 加藤左馬介 三百三十一 笈和泉守

三百一 毛利壹岐守 五百三十一 毛利豊前守 四百三十一 相良左兵衛佐

七百六十八 島津冬郎 六百三十一 秋月三郎 六百 高橋九郎

都合一萬三千二百三十八 奉行在判

味方の内討死 二千八百餘也

秀詮公其表の松神洋ふ山紀有て言上遊一けるが所候も少く各
水之味方僅上二万八千餘の勢とて十方騎の敵を遣ひ角大勢
得とて軍事日本の吉事と云ふ満足のありあり大敵回をより飢饉
まくる故若干の軍勢と付きて引ぬと候も仰る角と和泉守に

家老下野も向てまゝ今大將軍公具足初の合戦も三國無双
の勝下知を以て討つて首級を鼻をうきあればとて此草深き如
く捨をさし小非だ釜山海の大濠一か一山城に掛置敷人ふは
一と我もまゝ斯りけりや小備前美也も國主浮田中絶言周防
國主毛利軍相阿波國主峰須賀阿波も讃岐國主生駒雅樂頭同
様はもまゝ國主松浦肥前も土佐國主長曾我部土佐も薩摩國主
島津兵庫頭鍋島信濃も小寺甲斐も藤堂佐渡も中川他理も
等と初て其外各軍敵にて我川原の戦場も来り芝居はふ以て移
系中絶もまゝ小柄の振申上る秀詮公も笈有るへい小汝等過分
の國都を下しとて沙用もまゝとて此前代未聞

の籠城を聞かざり其方等入馬をよき懸ひて後法も加勢を成
 するに十二月廿五日の比より面々案帳はけりしを九山の湊まで
 ゆく何のきりかた又合戦更過る此表より杖ふまがり出で大敵
 若も取て返一二の日の合戦を結事あつた何働きの新存を
 やとたふ念を捨り諸大將定み誤けまは返答を申上得
 ちを頭と地ふは居るけり諸軍勢を聞え相も無換の
 大將武へまて十七歳小も成せ給ひ働の大やが河洞のあつた
 よと上下耳目を尋ねり一系其より秀詮公九山に備をへらる
 又黒帽二騎蔚山の城下を籠城の体をも重く感あされ西を
 海ふあり一主計は軍兵を早に蔚山に替へ籠士を西に海

の城に移しき人ふ五人並の扶持を帰朝ふまてきりあつた
 水の苦勞休息させ給へり又回冬廿二日より今日ふも其間
 十日米水を絶て日々の大勇洋ふ記一飛驒を一判を以て言上仕
 へき昔仰りし三大將は清申上も便にゆりたる然るも明州の大軍
 悉く退るやりととども城内におも曾て油取せ給ひ山谷の間より又
 敵出る事有りて上下志のまり返り居りしに海と敵
 千乗はづる兵船ども我先ふと押入ふ城中より星を見えたる
 らに合圍の早境を責らまはせられを聞清皆を波よゆけ
 るが諸人餘り小堪るひて舟を湊に押はる申の刻に蔚山に
 馳より知も走らばつても籠兵餓鬼の根城をよとて胃のよ返り